

島崎藤村

島 崎 藤 村

新潮社版



日本文学全集 4

島 崎 藤 村

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日
発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162
印刷所／三晃印刷株式会社 製本所／大進堂製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

目次

破戒 五

春 二五七

ある女の生涯 四五九

嵐 四九九

注解 五四五

年譜 五四九

解説 五六一

平野謙

島
崎
藤
村

破 戒

第一章

一

蓮華寺では下宿を兼ねた。瀬川丑松が急に転宿を思い立って、借りることにした部屋というのは、其蔵裏つづきにある二階の角のところ。寺は信州下水内郡飯山町二十何カ寺の一つ、真宗に附属する古刹で、丁度其二階の窓に倚凭つて眺めると、銀杏の大木を経て飯山の町の一部分も見える。さすが信州第一の仏教の地、古代を眼前に見るような小都會、奇異な北国風の屋造、板葺の屋根、または冬の雪除として使用する

特別の軒庇から、ところどころに高く聳れた寺院と樹木の梢まで——すべて旧めかしい町の光景が香の煙の中に包まれて見える。ただ一際目立って此窓から望まれるものと言へば、現に丑松が奉職して居る其小学校の白く塗った建築物であつた。

丑松が転宿を思い立ったのは、実は甚だ不快に感ずることが今の下宿に起つたからで。尤も賄でも安くなければ、誰も斯様な部屋に満足するものは無からう。壁は壁紙で張りつめて、それが煤けて茶色になつて居た。粗造な床の間、紙表具の軸、外には古びた火鉢が置いてあるばかりで、何となく世離れた、静寂な僧坊であつた。それがまた小学教師という丑松の今の境遇に映つて、妙に佗しい感想を起させもする。

今の下宿には斯ういう事が起つた。半月程前、一人の男を供に連れて、下高井の地方から出て来た大日向という大尽、飯山病院へ入院の為とあつて、暫時腰掛に泊つて居たことがある。入院は間もなくであつた。もとより内証はよし、病院は第一等、看護婦の肩に懸つて長い廊下を往つたり来たりするうちには、自然と

豪奢が人の目にもついて、誰が嫉妬で噂するともなく、「彼は穢多だ」ということになった。忽ち多くの病室へ伝つて、患者は総立。「放逐して下え、今直ぐ、それが出来ないとあらば吾儕拳つて御免を蒙る」と腕捲りして院長を脅すという騒動。いかに金尽でも、この人種の偏執には勝たれない。ある日の暮、籠に乗せられて、夕闇の空に紛れて病院を出た。籠は其儘もとの下宿へ舁ぎ込まれて、院長は毎日のように来て診察する。さあ今度は下宿のものが承知しない。丁度丑松が一日の勤務を終つて、疲れて宿へ帰つた時は、一同「主婦を出せ」と喚き立てるところ。「不浄だ、不浄だ」の罵詈は無遠慮な客の口唇を衝いて出た。「不浄だとは何だ」と丑松は心に憤つて、蔭ながらあの大日向の不幸を憐んだり、道理のないこの非人扱いを慨いたりして、穢多の種族の悲惨な運命を思いつづけた——丑松もまた穢多なのである。

見たところ丑松は純粹な北部の信州人——佐久小県あたりの岩石の間に成長した壮年の一人とは誰の目にも受取れる。正教員という格につけられて、学力優等

の卒業生として、長野の師範校を出たのは丁度二十二年の年齢の春。社会へ突出される、直に丑松はこの飯山へ来た。それから足掛三年目の今日、丑松はただ熱心な青年教師として、飯山の町の人に知られて居るのみで、實際穢多である、新平民であるということは、誰一人として知るものが無かつたのである。

「では、いつ引越していらっしゃいますか」

と声をかけて、入つて来たのは蓮華寺の住職の四偶。年の頃五十前後。茶色小紋の羽織を着て、瘡せた白い手に珠数を持ち乍ら、丑松の前に立つた。土地の習慣から「奥様」と尊敬められて居る斯の有髪の尼は、昔者として多少教育もあり、都会の生活も万更知らないでも無いらしい口の利き振であつた。世話好きな性質を顔にあらわして、微な声で口癖のように念仏して、相手の返事を待つて居る様子。

其時、丑松も考えた。明日にも、今夜にも、と言いたい場合ではあるが、さて差当つて引越しするだけの金が無かつた。實際持合せは四十銭しかなかった。四十銭で引越しの出来よう筈も無い。今の下宿の払いも

しなければならぬ。月給は明後日でなければ渡らないとすると、否でも応でも其迄待つより外はなかった。「斯うしましょう、明後日の午後ということにしましょう」

「明後日？」と奥様は不思議そうに相手の顔を眺めた。

「明後日引越すのは其様に可笑いでしょうか」丑松の眼は急に輝いたのである。

「あれ——でも明後日は二十八日じゃありませんか。別に可笑いということは御座いせんがね、私はまた月が變つてから来つしやるかと思ひましてサ」

「むむ、これはおおきに左様でしたなあ。実は私も急に引越しを思ひ立ったものですから」

と何気なく言消して、丑松は故意と話頭を變えて了った。下宿の出来事は烈しく胸の中を騒がせる。それを聞かれたり、話したりすることは、何となく心に恐しい。何か穢多に關したことになる、毎時もそれを避けるようにするのが是男の癖である。

「なむあみだぶ」

と口の中で唱えて、奥様は別に深く掘って聞こうともしなかった。

二

蓮華寺を出たのは五時であつた。学校の日課を終ると、直ぐ其足で出掛けたので、丑松はまだ勤務の儘の服装で居る。白墨と塵埃とで汚れた着古しの洋服、書物やら手帳やらの風呂敷包を小脇に抱えて、それに下駄穿、腰弁当。多くの労働者が人中で感ずるような羞恥——そんな思を胸に浮べ乍ら、鷹匠町の下宿の方へ歸つて行つた。町々の軒は秋雨あがりの後の夕日に輝いて、人々が濡れた道路に群つて居た。中には立ちどまつて丑松の通るところを眺めるもあり、何かひそひそ立話をして居るものもある。「彼処へ行くのは、ありやあ何だ——むむ、教員か」と言つたような顔付をして、酷しい輕蔑の色を顯して居るものもあつた。是が自分等の預つて居る生徒の父兄であるかと考えると、淺猿しくもあり、腹立たしくもあり、遽に不愉快になつてすたすた歩き初めた。

本町の雜誌屋は近頃出来た店。其前には新着の書物を筆太に書いて、人目を引くように張出してあった。

かねて新聞の広告で見て、出版の日を楽しみにして居た『懺悔録』——肩に猪子達太郎氏著、定価までも書添えた広告が目につく。立ちどまって、其人の名を思出してさえ、丑松はもう胸の踊るような心地がしたのである。見れば二三の青年が店頭に立って、何か新しい雑誌でも獵って居るらしい。丑松は色の褪せたズボンの袖囊の内へ手をつ突込んで、人知れず銀貨を鳴らして見ながら、幾度か其雑誌屋の前を往ったり来たりした。兎に角、四十銭あれば本が手に入る。しかし其を今茲で買つて了えば、明日は一文無しで暮さなければならぬ。転宿の用意もしなければならぬ。斯ういう思想に制せられて、一旦は往きかけて見たようなものの、やがて復た引返した。ぬっと暖簾を潜って入って、手に取って見ると——それはすこし臭氣のするやうな、粗惡な洋紙に印刷した、黄色い表紙に『懺悔録』としてある本。貧しい人の手にも触れさせたいという趣意から、わざと質素な体裁を採んだのは、是書

の性質をよく表して居る。ああ、多くの青年が読んで知るといふ今の世の中に、飽くことを知らない丑松のような年頃で、どうして読まず知らずに居ることが出来るやう。智識は一種の饑渴である。到頭四十銭を取出して、欲しいと思う其本を買求めた。なけなしの金とはいふ乍ら、精神の慾には替えられなかつたのである。

『懺悔録』を抱いて——買つて反つて丑松は氣の衰顔を感じ乍ら、下宿をさして歸って行くと、不図、途中で学校の仲間に出逢つた。一人は土屋銀之助と言って、師範校時代からの同窓の友。一人は未だ極く年若な、此頃準教員に成つたばかりの男。散歩とは二人のぶらぶらやつて来る様子でも知れた。

「瀬川君、大層遅いじゃないか」

と銀之助は洋杖を鳴し乍ら近づいた。

正直で、しかも友達思ひの銀之助は、直に丑松の顔色を見て取つた。深く澄んだ目付は以前の快活な色を失つて、言うに言われぬ不安の光を帯びて居たのである。「ああ、必定身体の具合でも悪いのだらう」と銀

之助は心に考えて、丑松から下宿を探しに行った話を聞いた。

「下宿を？ 君はよく下宿を取替える人だねえ——此頃あそこの家へ引越したばかりじゃないか」

と毒の無い調子で、さも心から出たように笑った。

其時丑松の持つて居る本が目についたので、銀之助は洋杖を小脇に挟んで、見せろという言葉と一緒に右の手を差出した。

「是かね」と丑松は微笑みながら出して見せる。

「むむ、『懺悔録』か」と準教員も銀之助の傍に倚添いながら眺めた。

「相変らず君は猪子先生のものが好きだ」斯う銀之助は言つて、黄色い本の表紙を眺めたり、一寸内部を開けて見たりして、「そうそう新聞の広告にもあつたッけ——へえ、斯様な本かい——斯様な質素な本かい。

まあ君のは愛読を通り越して崇拜の方だ。はゝゝゝゝ、よく君の話には猪子先生が出るからねえ。無かしまた聞かせられることだろうなあ」

「馬鹿言いたまへ」

と丑松も笑つて其本を受取つた。

夕霧の群は低く集つて来て、あそこでも、ここでも、最早ちらちら灯が点く。丑松は明後日あたり蓮華寺へ引越すという話をして、この友達と別れたが、やがて少許行つて振返つて見ると、銀之助は往來の片隅に佇立んだ儘、熟と是方を見送つて居た。半町ばかり行つて復た振返つて見ると、未だ友達は同じところに佇立んで居るらしい。夕餐の煙は町の空を籠めて、悄然とした友達の姿も黄昏れて見えたのである。

三

鷹匠町の下宿近く来た頃には、鉦の音が遠近の空に響き渡つた。寺々の宵の勤行は始つたのであろう。丁度下宿の前まで来ると、あたりを警める人足の声も聞えて、提灯の光に宵闇の道を照し乍ら、一挺の籠が昇がれて出るところであつた。ああ、大尽が忍んで出るのであろう、と丑松は憐んで、黙然として其処に突立つて見て居るうちに、いよいよ其とは附添の男で知れた。同じ宿に居たとは言ひ乍ら、ついぞ丑松は大日向

を見かけたことが無い。唯附添の男ばかりは、よく薬の罎ひんなぞを提ひげて、出たり入ったりするところを見かけたのである。その雲を突くような大男が、今、尻端しっぽ折りで、主人を保護したり、人足を指図したりする甲斐かい甲斐しさ。穢多の中でも卑賤いやしい身分のものと見え、其処に立つて居る丑松を同じ種族やからとは夢にも知らないで、妙に人を憚はかるような様子して、一寸会釈えしやくし乍ら側を通りぬけた。門口に主婦かみさん、「御機嫌よう」の声も聞える。見れば下宿の内は何となく騒々しい。人々は激昂げつこうしたり、憤慨ふんがいしたりして、いずれも聞えよがしに罵ののつて居る。

「難有ありかとうぞんじます——そんなら御氣をつけなすつて」

とまた主婦は籠の側へ駈寄かきって言った。籠の内の人は何とも答えなかった。丑松は黙って立った。見る見る昇がれて出たのである。

「ざまあ見やがれ」

これが下宿の人々の最後に揚げた凱歌がいかであった。

丑松がすこし蒼あおざめた顔をして、下宿の軒を潜ひそって

入った時は、未だ人々が長い廊下に群ぐって居た。いずれも感情を制おさえきれないという風で、肩を怒おこらして歩くもあり、板の間を踏み鳴らすもあり、中には塩を掴つかんで庭に撒散きよめらす弥次馬もある。主婦は燧石ひうちいしを取出して、清浄きよめの火と言いって、かちかち音をさせて騒さわいだ。

哀憐あわれみ、恐怖おそ、千々の思は烈はげしく丑松の胸中を往来わらいした。病院から追われ、下宿から追われ、其残酷な待遇たいぐと恥辱ちじよくとをうけて、黙もくって昇がれて行く彼の大尽の運命を考えると、嘸ま籠の中の人は悲慨なげきの血涙ちんだに噎むせんだであらう。大日向の運命は聽やてすべての穢多の運命である。思えば他事ひたごとでは無い。長野の師範校時代から、この飯山に奉職の身となつたまで、よくまあ自分は平氣の平左で、普通の人と同じような量見で、危いとも恐いとも思わずに通とり越して来たものだ。斯かうなると胸に浮うぶは父のことである。父というのは今、牧夫をして、烏帽子えぼしヶ岳たけの麓に牛を飼かつて、隠者いんしやのような寂しい生涯を送おくつて居る。丑松はその西乃入牧場せいのみいりぼくばうを思出した。その牧場の番小屋を思出した。

「阿爺おとつさん、阿爺さん」

と口の中で呼んで、自分の部屋をあちこちあちこちと歩いて見た。不図父の言葉を思出した。

はじめて丑松が親の膝下を離れる時、父は一人息子の前途を深く案じるという風で、さまざまな物語をして聞かせたのであった。其時だ——一族の祖先のことも言い聞かせたのは。東海道の沿岸に住む多くの穢多の種族のように、朝鮮人、支那人、露西亞人、または名も知らない島々から漂着したり帰化したりした異邦人の末とは違い、その血統は古の武士の落人から伝つたもの、貧苦こそすれ、罪惡の為に穢れたような家族ではないと言ひ聞かせた。父はまた添付して、世に出て身を立てる穢多の子の秘訣——唯一つの希望、唯一つの方法、それは身の素性を隠すより外に無い、「たとえいかなる目を見ようと、いかなる人に邂逅おうと決して其とは自白けるな、一旦の憤怒悲哀に是戒を忘れたら、其時こそ社会から捨てられたものと思え」斯う父は教えたのである。

一生の秘訣とは斯の通り簡単なものであった。「隠せ」——戒はこの一語で尽きた。しかし其頃はまだ無

我夢中、「阿爺が何を言うか」位に聞流して、唯もう勉強が出来るという嬉しさに家を飛出したのであった。楽しい空想の時代は父の戒も忘れ勝ちに過ぎた。急に丑松は少年から大人に近づいたのである。急に自分のことが解つて来たのである。まあ、面白い隣の家から面白くない自分の家へ移つたように感ずるのである。今は自分から隠そうと思うようになった。

四

あおのけさまに畳の上へ倒れて、暫時丑松は身動きもせずに考えて居たが、臆て疲労が出て眠て了つた。不図目が覚めて、部屋の内を見廻した時は、点けて置かなかつた筈の洋燈が寂しそうに照して、夕飯の膳も片隅に置いてある。自分は未だ洋服の儘。丑松の心地には一時間余も眠つたらしい。戸の外には時雨の降りそそぐ音もする。起き直つて、買つて来た本の黄色い表紙を眺め乍ら、膳を手前へ引寄せて食つた。飯櫃の蓋を取つて、あつめ飯の臭気を嗅いで見ると、丑松は最早嘆息して了つて、そこそこにして膳を押遣つたの

である。『懺悔録』を披^{ひら}げて置いて、先ず残りの巻煙草に火を点けた。

この本の著者——猪子蓮太郎の思想は、今の世の下層社会の「新しい苦痛」を表^{あらわ}白^わすと言われて居る。人によると、彼男^{あの男}ほど自分を吹聴^{ふいちょう}するものは無いと言つて、妙に毛嫌^{けげん}するような手合もある。成程、其筆にはいつも一種の神経質があつた。到底蓮太郎は自分を離れて説話^{はなし}をすることの出来ない人であつた。しかし思想が剛健で、しかも觀察の精緻^{せいし}を兼ねて、人を吸引^{ひきつ}ける力の壮^{さか}んに溢れて居るといふことは、一度其著述を読んだものの誰しも感ずる特色なのである。蓮太郎は貧民、労働者、または新平民等の生活状態を研究して、社会の下層を流れる清水に掘りあてゐる迄は倦^うまず撓^なまず努力^とめるばかりでなく、また其を読者の前に突着けて、右からも左からも説明^と明^{めい}して、呑込めないと思ふことは何度繰返しても、読者の腹^{おなか}の中に置かなければ承知しないという遣方^{やうかた}であつた。尤も蓮太郎のは哲学とか経済とかの方面から左様^{さう}いふ問題^{問題}を取扱^{そく}わらないで、寧^{むし}ろ心理の研究に基礎^{きそ}を置いた。文章はただ岩石

を並べたように思想を並べたもので、露骨^{むきだし}なところに反つて人を動かす力があつたのである。

しかし丑松が蓮太郎の書いたものを愛読するのは唯其丈^{ただ}の理由からでは無い。新しい思想家でもあり戦士でもある猪子蓮太郎という人物が穢多^たの中から産れたという事実は、丑松の心に深い感動を与えたのである。まあ、丑松の積りでは、隠^{ひそ}かに先輩として慕^うつて居るのである。同じ人間であり乍ら、自分等ばかり其様^{そのよう}に輕蔑^{けいべつ}される道理が無い、という烈しい意気込を持つようになったのも、実はこの先輩の感化であつた。斯ういう訳から、蓮太郎の著述といへば必ず買つて読む。雜誌に名が出る、必ず目を通す。読めば読む程丑松はこの先輩に手を引かれて、新しい世界の方へ連れて行かれるような氣がした。穢多^たとしての悲しい自覺^{じかく}はいつの間にか其頭^{もちあ}を擡^たげたのである。

今度の新著述は、「我は穢多なり」という文句で始めてあつた。其中には同族の無智と零落^{れいらく}とが活きた画のように描いてあつた。其中には多くの正直な男女が、ただ穢多の生れというばかりで、社会から捨てら

れて行く光景も写してあった。其中には又、著者の煩悶の歴史、歎し哀しい過去の追想、精神の自由を求めて、しかも其が得られないで、不調和な社会の為に苦みぬいた懷疑の昔語から、朝空を望むような新しい生涯に入る迄——熱心な男性の鳴咽の声を聞くように書きあらわしてあった。

新しい生涯——それが蓮太郎には偶然な身のみならず、きから開けたのである。生れは信州高遠の人。古い穢多の宗族ということは、丁度長野の師範校に心理学の講師として来て居た頃——丑松がまだ入学しない以前——同じ南信の地方から出て来た二三の生徒の口から泄れた。講師の中に賤民の子がある。是噂が全校へ播った時は、一同驚愕と疑心とで動揺した。ある人は蓮太郎の人物を、ある人はその容貌を、ある人はその学識を、いずれも穢多の生れと思われなと言つて、どうしても虚言だと言張るのであった。放逐、放逐、声は一部の教師仲間の嫉妬から起つた。嗚呼、人種の偏執ということが無いものなら、「キシネフ」で殺される猶太人もなかるうし、西洋で言嘯す黄禍の説もなか

ろう。無理が通れば道理が引込むという斯世の中に、誰が穢多の子の放逐を不当だと言うものがあるう。いよいよ蓮太郎が身の素性を自白して、多くの校友に別離を告げて行く時、この講師の為に同情の涙を流すものは一人もなかった。蓮太郎は師範校の門を出て、「学問の為の学問」を捨てたのである。

この当時の光景は『懺悔録』の中に精しく記載してあった。丑松は身につまされるかして、幾度か読みかけた本を閉じて、目を瞑つて、やがて其を読むのは苦しくなつて来た。同情は妙なもので、反つて底意を汲ませないようなことがある。それに蓮太郎の筆は、面白く読ませるといふよりも、考えさせる方だ。終には丑松も書いてあることを離れて了つて、自分の一生ばかり思いつづけ乍ら読んだ。

今日まで丑松が平和な月日を送つて来たのは——主に少年時代からの境遇にある。そもそもは小諸の向町（穢多町）の生れ。北佐久の高原に散布する新平民の種族の中でも、殊に四十戸ばかりの一族の「お頭」と言われる家柄であった。獄卒と捕吏とは、維新前ま

で、先祖代々の職務であつて、父はその監督の報酬として、租税を免ぜられた上、別に俸米をあてがわれた。それ程の男であるから、貧苦と零落との為め小郡の方へ家を移した時にも、八歳の丑松を小学校へやることは忘れなかつた。丑松が禰津村の学校へ通ううになつてからは、もう普通の児童で、誰もこの可憐な新入生を穢多の子と思うものはなかつたのである。

最後に父は姫子沢の谷間に落着いて、叔父夫婦も一緒に移り住んだ。異つた土地で知るものは無し、強いて是方から言う必要もなし、といったような訳で、終には慣れて、少年の丑松は一番早く昔を忘れた。官費の教育を受ける為に長野へ出掛ける頃は、ただ先祖の昔話としか考えて居なかつた位で。

斯ういう過去の記憶は今丑松の胸の中に復活した。

七つ八つの頃まで、よく他の小供に調戲われたり、石を投げられたりした、其恐怖の情はふたたび起つて来た。朦朧ながらあの小諸の向町に居た頃のことを思出した。移住する前に死んだ母親のことなどを思出した。「我は穢多なり」——ああ、どんなに是一句が丑

松の若い心を掻乱したろう。『懺悔録』を読んで、反つて丑松はせつない苦痛を感じるようになった。

第二章

一

毎月二十八日は月給の渡る日とあつて、学校では人の顔付も殊に引立つて見えた。課業の終を告げる大鈴が鳴り渡ると、男女の教員はいずれも早々に書物を片付けて、受持々々の教室を出た。悪戯盛りの少年の群は、一時に溢れて、其騒しさ。弁当草履を振廻し、「ズック」の鞆を肩に掛けたり、風呂敷包を背負ったりして、声を揚げ乍ら帰つて行つた。丑松もまた高等四年の一組を済まして、右左に馳せちがう生徒の中を職員室へと急いだのである。

校長は応接室に居た。斯人は郡視学が変ると一緒にこの飯山へ転任して来たので、丑松や銀之助よりも後から入った。学校の方から言うと、二人は校長の小